

## 大正11年8月の大洪水

『常呂町岐阜部落開基80周年記念誌』からの抜粋・編集

(略) 大正11年、築堤工事着工以来、イワケシユ山麓を起点とする<sup>13</sup>間、また14号付近及び9号近くを起点とする3ヶ所の工事は順調に進捗してきた。  
この工事と治水を祈念して聖徳太子像を建立している。

(注：大正11年6月15日 共立川東に聖徳太子碑建立)

しかし、物事は決して人びとが願うように進まないのが世の常である。

夏季に入るとしばしば出水して工事は難航を思わせたが、ついに8月23日は開拓史上最大の大洪水となったのである。上流からの濁り水とともに巨大な数知れない流木が農作物はもちろんのこと、多くの民家まで滝のごとく流し去ってしまった。

当時の悲惨な姿を古老の話から再現してみよう。

17号の堤防は見る間に破られ、14号の河川上橋(トロ引き鉄路)の切断など、特に13号周辺の部落民には大きな損害を与える大惨事となったのである。

この日、23日は好天の日和であり、住民のすべてが昨日の雨降りが止み、ほっとしていた時、突然役場から緊急避難するよう通報が入った。しかし、人びとの多くは急に信じることもできず、通報の指示通り避難する者は僅少だったという。

(注：「常呂村当直口誌」から抜粋)

8月24日 木曜日 午前6時頃より降雨、暴風、終日豪雨

連日降雨のため、常呂川出水のもようあり。なお、農事試験所北見支部長より

常呂川出水、水害の恐れある旨、午後2時5分電信電報あり。ただちに各部落に  
通達する。

村長は右電報到着につき、治水事務所に打合せとして外出する。( )

その後、情報は刻々と入ってきたが、正午過ぎになって事態はますます悪化してきた。

この時になって住民の多くは家の周りを整理する者、築堤警備に走る者など部落全体に慌ただしい緊張がみなぎってきた。

夕刻になって17号堤防決壊、14号鉄橋路切断の悲報が飛んだ。民家は泥流と共にどんどん流されていく。ある者は屋根につかまったまま流され、助けを求める叫び声だけがしだいに遠ざかっていく。不安と悲しみに包まれ、離ればなれになった家族を互いに捜し求める声、夜の更けるまで荒れ狂う常呂川周辺をこだましていたという。

明けて24日の朝は泥水もおさまり、人びとは一応安心したが、寺(注：高德寺)をはじめ、森本商店は跡形もなく流失、民家数戸もその面影なく流されていた。

25日、当時太茶苗にあった岡崎重吉の家屋も上流から流されてきて、10号の防風林に止まったが、わずかな衣類を見つげ出すにすぎなかったという。(略)

(略) 大正11年に入っても築堤工事は着々と進んだが、同年8月24日～25日にまたも大洪水に見舞われ、大きな被害を被った。

この時の洪水位は、下常呂原野十五号水測所で平水位七・九五メートルのところ、九・六メートルにもなったことから十四号線新水路付近の築堤盛り土一万四千九百九十四立方メートルを流失するという事態を招いた。このため当初計画の堤防が陳情の結果、0・九メートルかさ上げされることになった。

この水害で多くの農作物を流失し、収入の道を断られた流域住民が治水工事で働くことになった。村の理事者も治水事務所现就労方を要請していたので、一種の救農土木工事の役割を果たし、工事は順調に進んだ。(略)

十四号新水路掘削工事で若い頃働いていたことのある地元の江田由蔵は、当時を回顧して次のように語っている。

21歳の時働き始めた(略)：大正11年8月の大水害では、私の家も床上1・2メートルまで水がつき、家財全部を流してしまった。当時、小麦、エン麦、エンドウを主に作付けしていたが収穫は皆無であり、そこで農家の者はみんな治水の現場で働かせてもらった。自分たちの田畑を守ってもらう堤防造りで働かせてもらい、賃金ももらえるのだから治水様々といったところであった。下常呂原野が今日あるのは、この堤防のおかげだ。(略)

『豊川区開基百年記念誌 ふるさと』からの抜粋

(略) 8月下旬天候不順となり、24日・25日と台風通過の影響で、網走では270ミリ、北見では240ミリの大雨が降り、開拓史上最大の洪水に見舞われた。建設中の堤防も濁流と巨大な流木に襲われ17号付近、13号付近とたちまち破られ、農作物はもちろんのこと、数多くの民家や14号の川に架けられていたトロ引き用の橋も流されるなどの大被害となった。特に13号付近の部落民には大きな損害を与え、高德寺をはじめ森本商店などは跡形もなく流され、太茶苗から流された家が10号の防風林にひっかかって止まるという被害は、いまだ語りぐさとなり伝説化している。(略)

『豊川区開基百年記念誌 ふるさと』収録「座談会 川治百年を語る」から抜粋

\*江田由蔵氏が書いた「思い出」を江田隆甫氏が紹介

(略) 大正11年8月23日、また大水害となり、豊川で7戸が流されました・森本商店、谷川さん、村岡蹄鉄屋、栗林旅館などで、その日の夕方暗くなってからでした。私も水が家につくというので家を片付けて川沿校に向けて逃げ出したのですが、川沿校に着くと暗くなっていました。

学校に着いて静かに聞いてみると、遠い方向で流れ行く家の屋根に乗って助けを呼ぶ声は、今なお耳に残っているようです。

8月24日、学校から自宅に帰ってみると驚きばかりです。自家用にする薪は1本残らず全部流されてしまい、家に入ってみれば家財道具全部汚水に浸かって何もなくなり、米も麦もなく、川から上がったような丸裸となり、川から上がったのだと思い、今度はガンバルしかないと思いました。(略)

\*この座談会では関連する発言が数ヶ所あるので抜粋して紹介

司会：先ほどの江田さんの資料の中で、何戸も家が流されたという水害の時は、14号にトロッコのレールを複線（注：堤防工事用のもの）にしてあり、それにゴミがつかえてダムのようになり、その一部が切れて鉄砲水になったという話で、今でも14号真向かいにその時の橋の杭があるはず…。(略)

司会：13号の沼の話だけれど、これからの将来を考えた時には、これからの人にはちよつと頭に入れておいた方が良いと思う。13号の沼は水が行ったり来たりするんだよね。あそこの下はバラスらしいから、一昨年の水害の時も堤防の水位が上がったら沼の水位も上がった。

諸岡：私が区長をしていた時、町の方に話したら、すぐに開発局が調査に来てボーリングしたら下はバラスなのでどうにもならないらしく堤防の補強工事をした。(略)

『富丘百年史』掲載の「大正11年の大水害」部分を抜粋 安藤浅次郎

(略) 大正11年の大水害で、安藤浅次郎は低台につないでいた馬を連れに行き、突然大木が津波のごとく押し寄せて来るのを見て、馬を放し、自分は大木に上って助かった。その馬は岐阜部落まで流され死んでいた。堀田亀太郎が入植した大正12年には、ライトコロ川沿いのくぼみに水害で死んだ馬の骨がよく見られたそうです。相次ぐ水害で離農した人や高台に移住した人もいた。

「私のあゆんだ道」 梅田キヌエ

常呂町高齢者大学「昭和59年度オホーツク大学文集 トーコロ」

大正11年の水害に関する記述部分を抜粋

私は明治42年、洞爺湖のほとりに生まれ育ち、12才の時に常呂村太茶苗、今の福山に来ました。

父は水田作りを目指してきたのですが、当時は水害の多い所でした。

大正11年に大水害があって、家もろとも全部流された。私らは丸木舟に乗って山に逃げた。着の身着のままでした。

『ところ文庫30 常呂川：洪水と治水の歴史』（平成26年3月発行）から抜粋

\*「北海タイムス」の記事を2本掲載しているので抜粋して紹介（現代文に編集）

8月29日付「北海タイムス」

「昨日から増水し、官民あわせて防水に務めたが狂暴な水の勢いは途方もなく、15号、14号築堤が決壊、11号以下下流の両岸は浸水し、原野一面は大海のよう。太茶苗市街は

全部浸水しているようであるが連絡が取れない。床上浸水家屋は300戸以上の見込み。畑地の被害は二千町歩以上。大正8年の水害よりも被害が多い。これらの被害者は公会堂と小学校に収容しているが、なお増水中」

\*9月20日付「北海タイムス」

「出水は明治31年の水量よりも大きく、39尺5寸という未曾有の出水だった。常呂村全体（太茶苗・手師学・川東・幌内・岐阜・川治・土佐）の各原野を襲い、農作物はほとんど全滅状態で流失、または泥土に覆われ、わずかに高台の一部に青苗が見えるにすぎない。二千八百三十八町歩の作付けに対して二千二百二十四町歩の被害地が生じている。浸水家屋は三百十五戸で、床上六尺以上が百十戸、四尺以上が百十二戸、二尺以上が二十八戸あるのを見てもいかに被害が甚大だったかが察せられる。流失家屋は三十一戸、住家二十一戸、非住家十棟、流失物件は家具八百六十五点、農具一千三百五十点、衣類一千八百七十四点、食料品一万五千三百二十点、その他一千三百三十点を流失し、橋梁の流失七ヶ所、破損五ヶ所、道路の欠損破損被害は七千円、堤防治水工事を除き十六ヶ所、避難所二十二ヶ所、避難者一千七百五十人、農作損害四十四万六千六百二十六円、その他十一万五千三百五十円、総計五十六万一千九百七十六円。（中略）常呂は市街地の住民を除く農民のほとんど全部が被害をこうむっている。ことに常呂村は十年もの長期間にわたり天災地変に会い、息を継ぐ間もなく不幸続きの村で、いっそう同情を禁じ得ない。この大水害に死傷者を一人も出さなかったのは24日の午後2時農事試験場から水害の報告があったその時はわずかに3〜4寸の増水に過ぎなかったけれども、早くも全村に避難の準備を伝えた」